

N 凶鑑

フエラチオ編

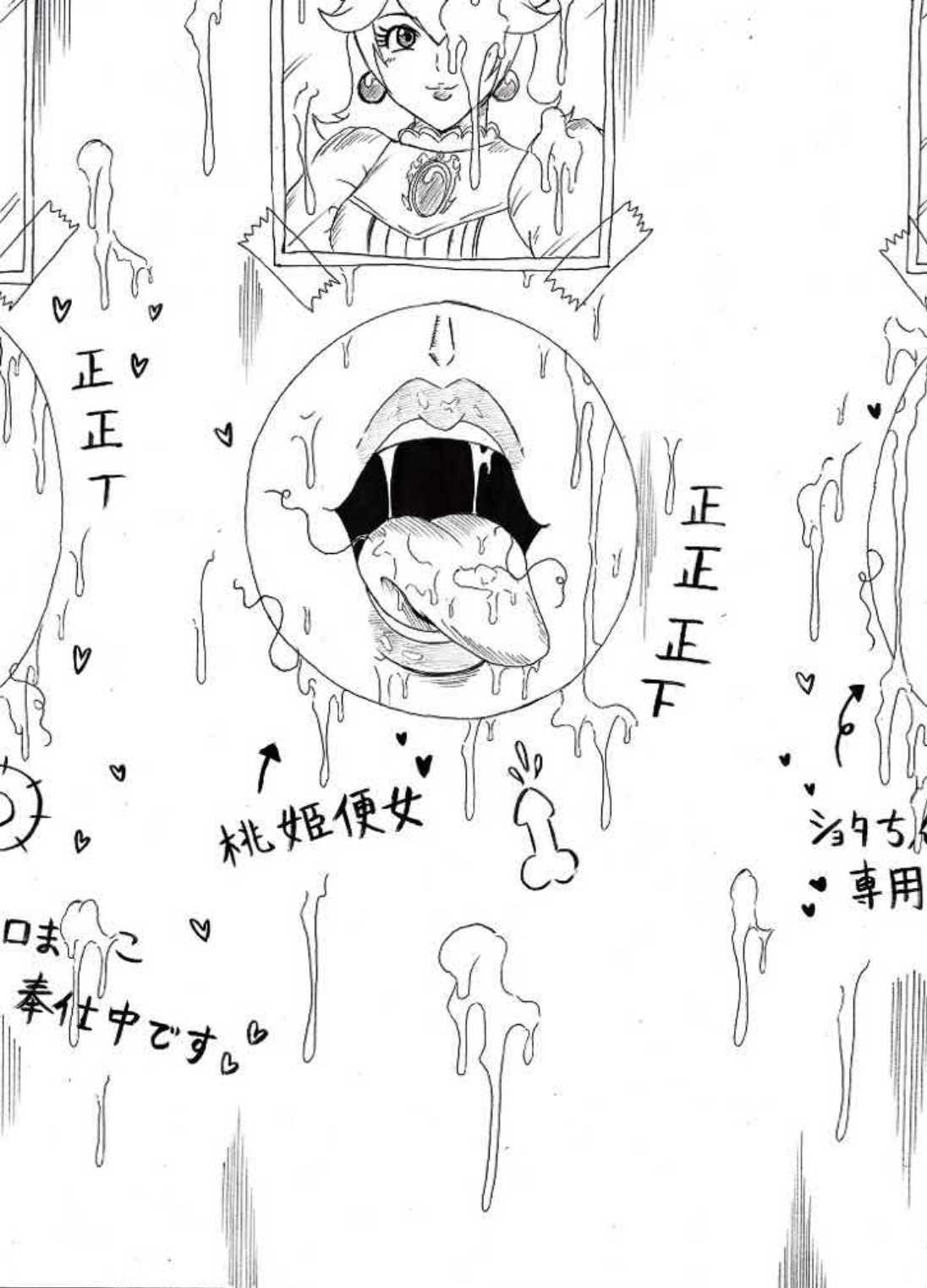


正正正
下

シヤチ
専用



にんにん堂



「いらっしやくい♡ちよつと汚れちゃってる
けど良かったら使ってちようだい♡
私、結構便女の評判良いのよ♡ほおら、
黙ってち●ぽ突っ込めばいいのよ…♡」



「もう、写真なんか見ないで私だけを
見て……えっ、その方が興奮する？」



「スターを回収する度に訪れては
こんなお願いして…」



「ハ●ラルの…民の為ならどんな辱めでも耐えてみせます…」

「元の姿に戻してくれた礼とは
言ったが…悪趣味なやつだ」

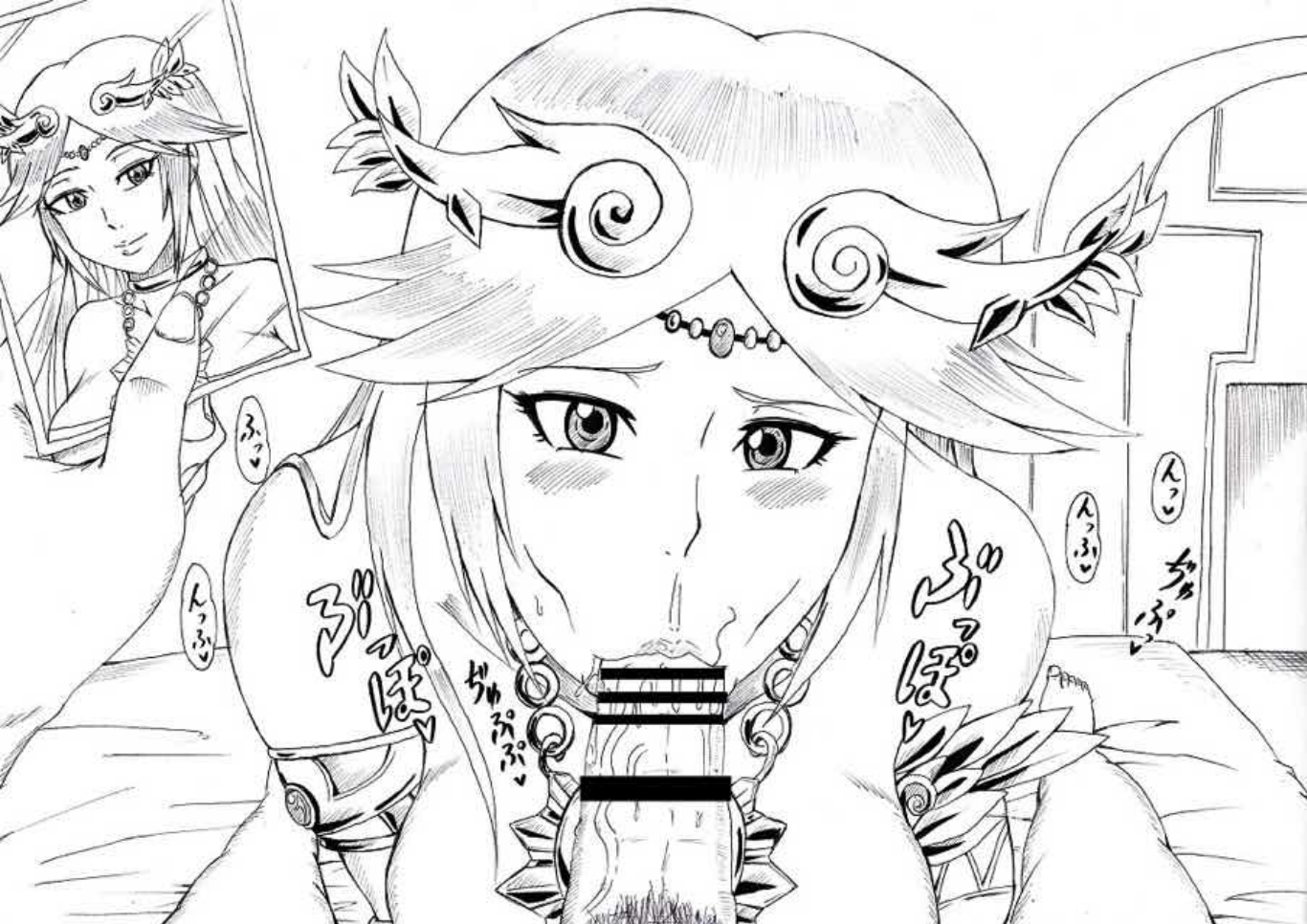




「旅を始めてから一カ月：フ●イを性の
捌け口にしか使用していません。
マスターが選ばれし者ではない確率上昇中：」



「これから仕事なんださつさと
済ませるぞ。そんな顔をする
な。……仕方ない、後でまた
続きをしてやる。」



「堪え性のない天使ですね、
もうヤラレちゃうのですか？」

「フオ●クス、いい加減先に
進まないと…敵が来ちゃう…」





「ラグズの…砂漠の女王である私に
ベオクの子種汁をぶちまけるとは…」



「僕にこんなことさせるなんて…早くしてくれ、誰かに見られたら厄介だろ」

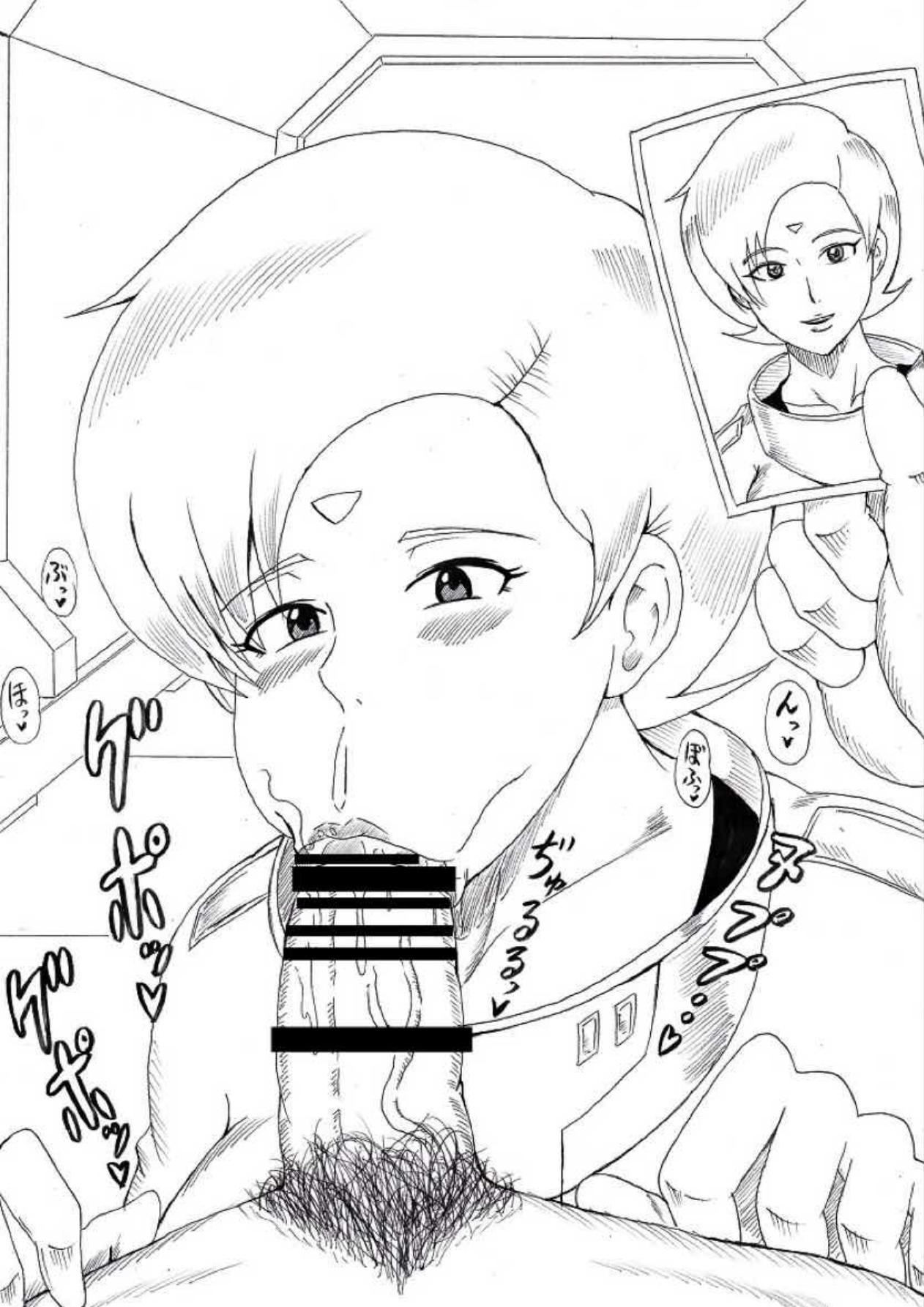


「これも未来を変える為なのですね…
分かりました：私、頑張ります」



「気にしないで下さい。これも聖王の務めです…
貴方のお役に立てるのなら…これしきのこと…」

「写真を手にしてから急激なペニスの膨張を
確認。発射するのであればいつでもどうぞ」





「如何ですか？ブ●ツクシヤドー様の
為なら喜んでご奉仕いたしますわ。」

「こんな大きいのお口に唾えさせる
なんて…ただじゃおかないから…」



「キヤプテン…これが本当に

ライドキーパーズの任務なんですか？」



「私の大ファンって言うならししようがない
わね…今日はサービスしちゃうんだから」



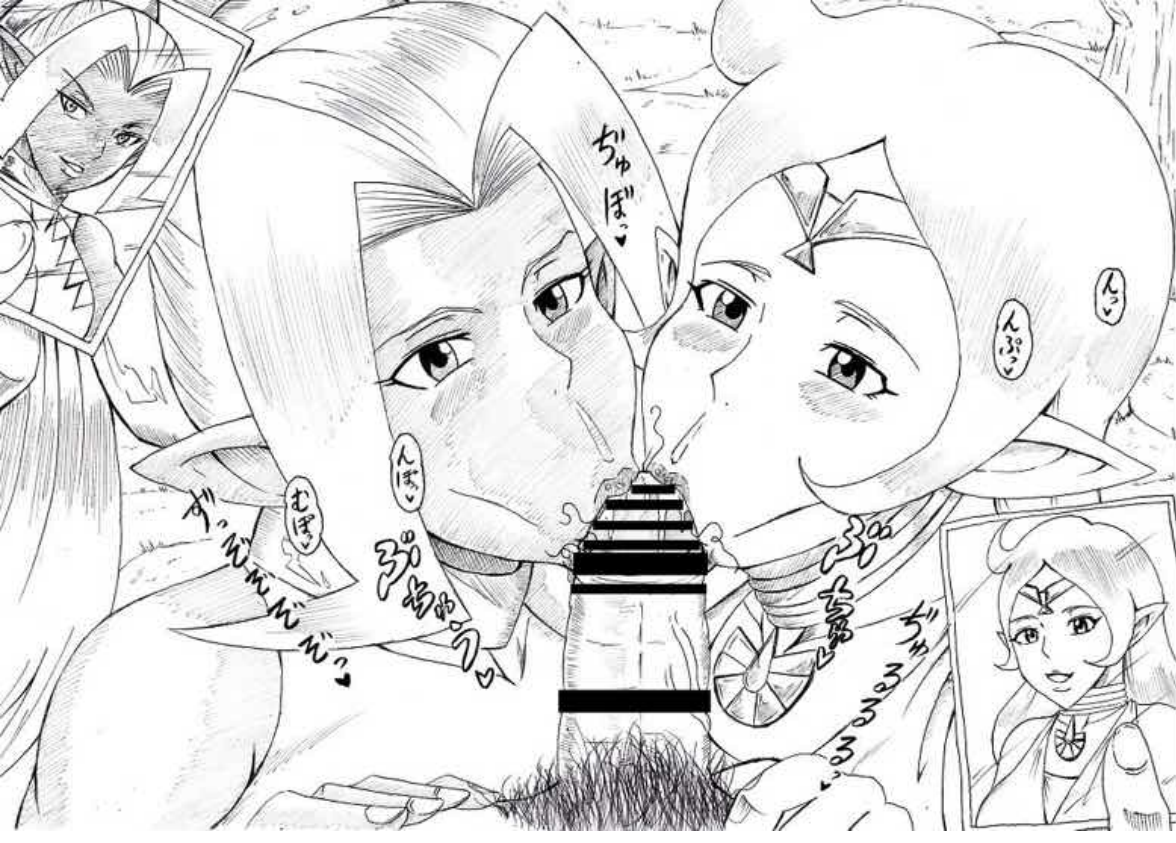
「ここも随分と立派になったようじゃの
 どうじゃ、フイアンセの口ま●こは？」

「何言ってるのよ。幼なじみの口ま●こ
 の方が良く決まってるわよね？」



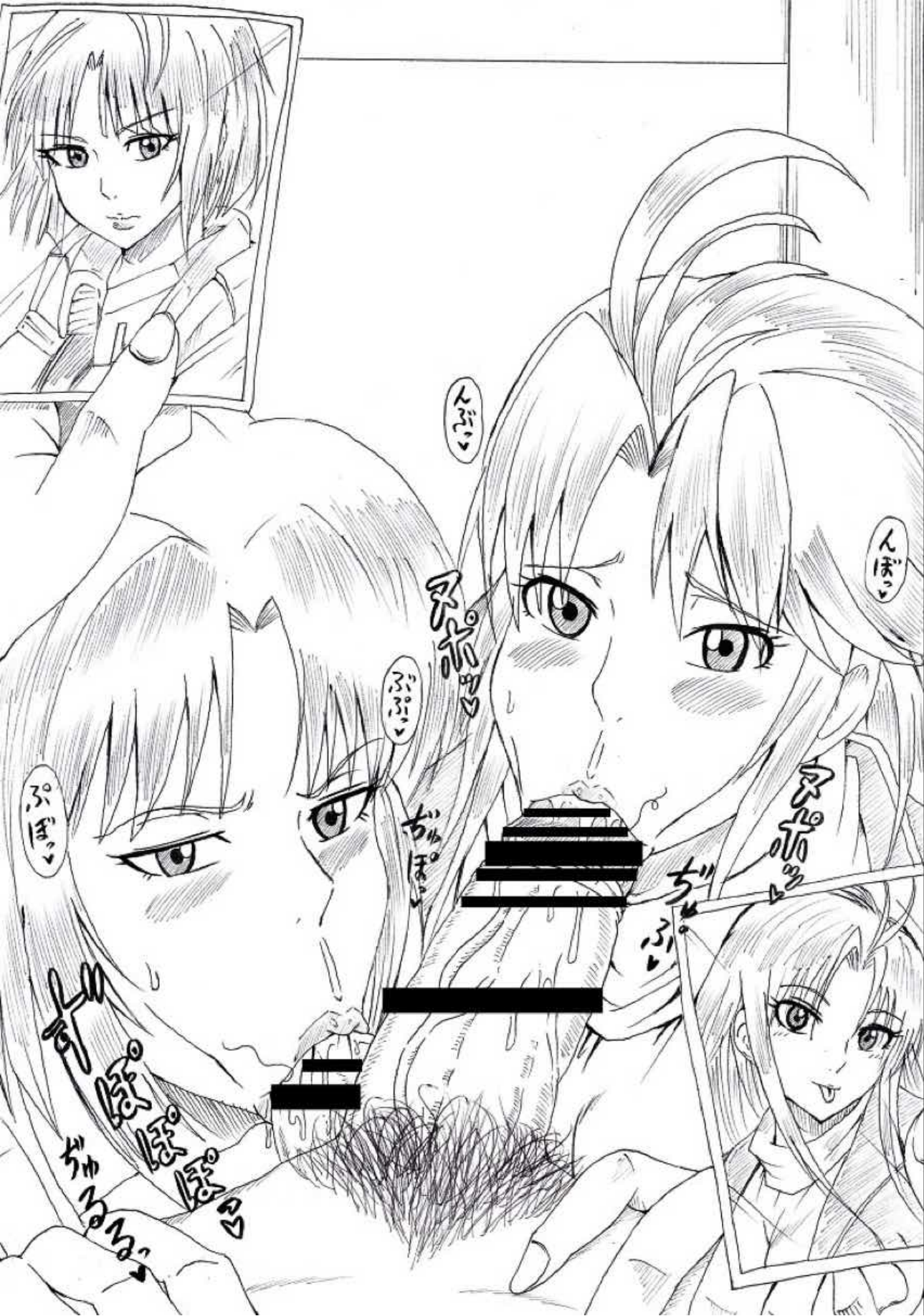
「歌で培った舌技で癒して癒して差し上げますね。」

「こっちは踊りで鍛えた体力がある。何度だって又いてやる」



「もう…今日は特別なんだからね」

「忠さん、顔がいやらしいです…」

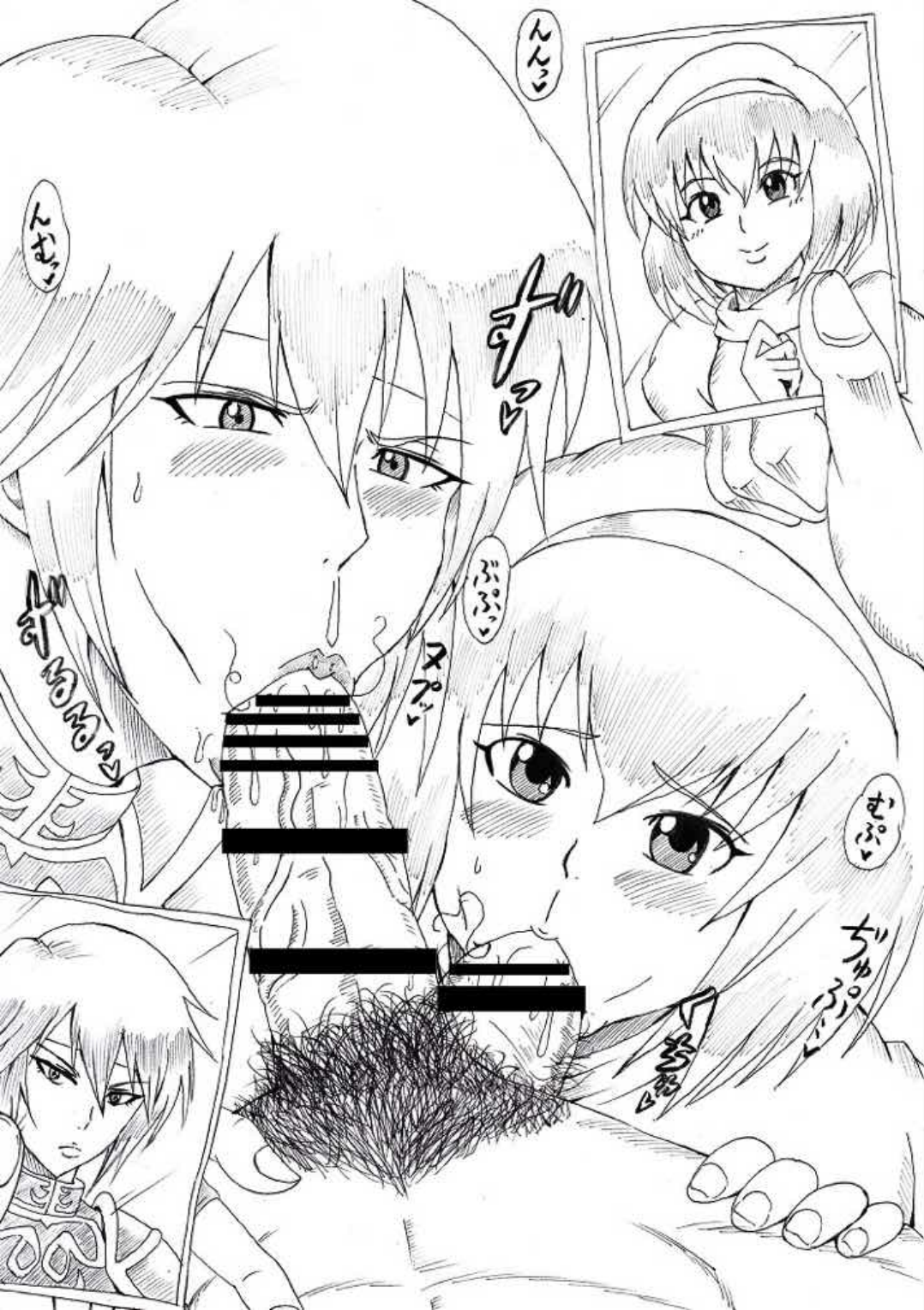


「マケドニア王国第一、第二王女の

ご奉仕は如何ですか？」

「この様なことには不慣れでな…

思い切り吸う？痛くないのか？」

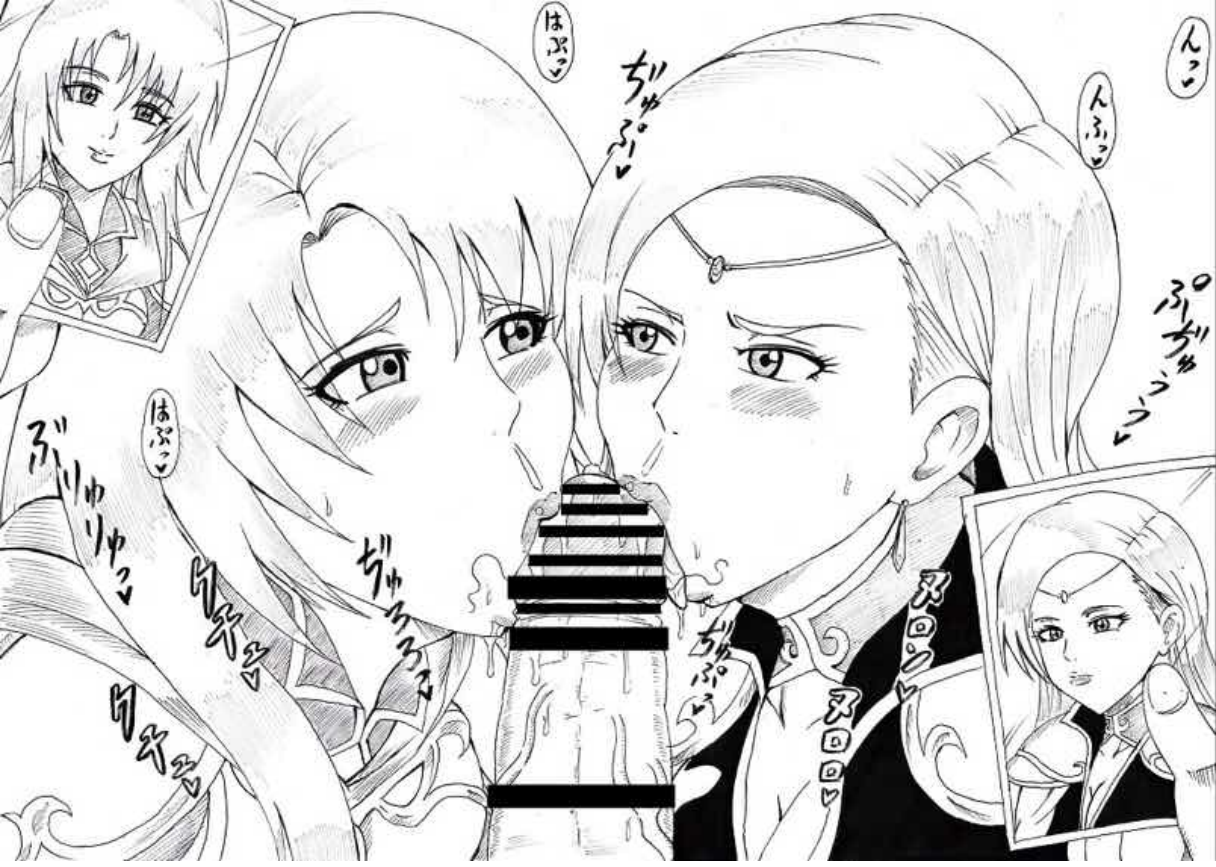


「私の超舌フィンドブルを前に

敵う者などいません」

「長年磨き上げた私の超舌

エイルカリバーも負けないわよ」





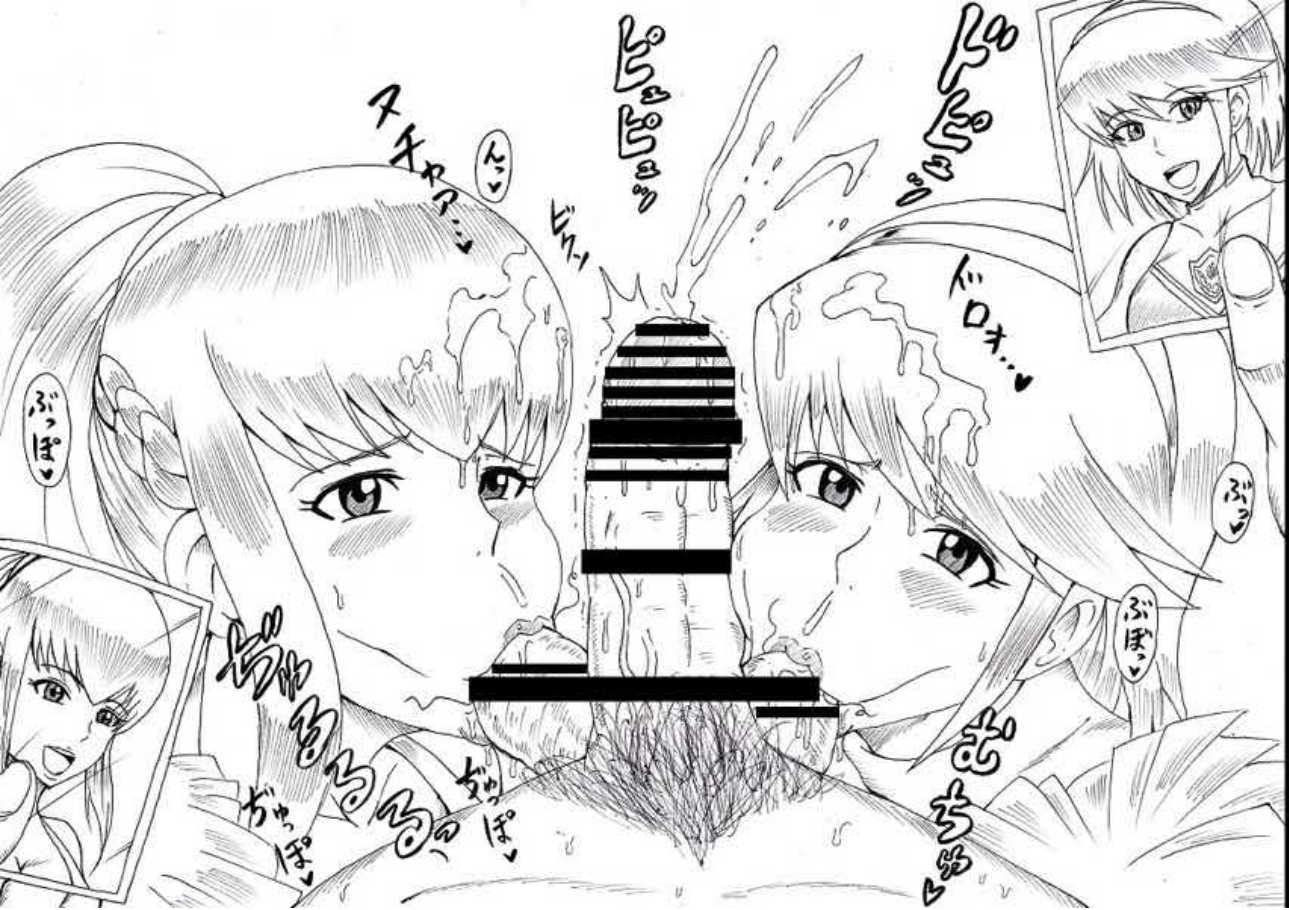
「ほらほら、カ●ラお姉ちゃんの方がいいでしょ?」

「弟を真に想っているのはヒ●カ姉さんの方だぞ。」

「ツ●サたちがいない間だけよ」

「キ●アにも勿論黙ってるのよ……」





「ほら、頑張っ
て。コレ…まだ出る
でしょ？」
「ファイトよ。君
なら出来るわ。」



「なんね？ブロマイドなんか出して。」

「いつもの決め台詞をやってほしい？」

「いいけど…それじゃいくよー」

「イカよろしく〜」

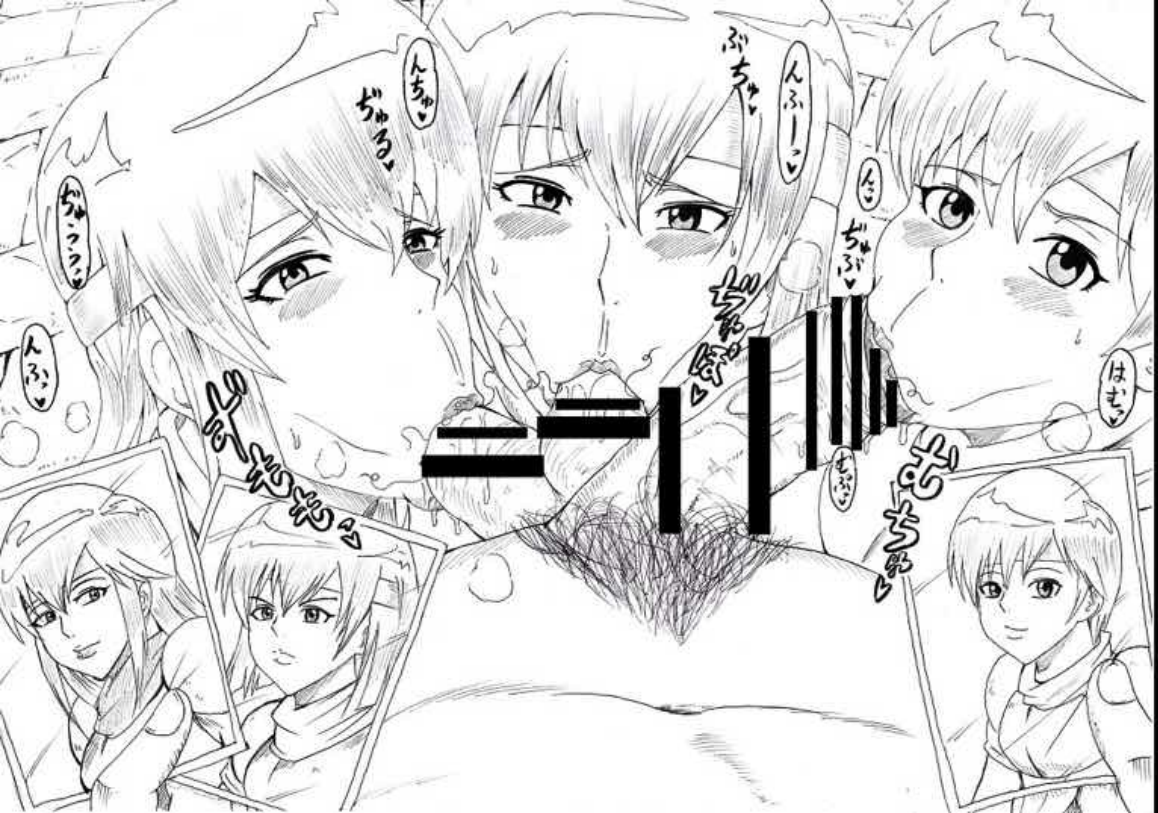


「私達を集めて何をする

のかと思えば……」

「マリ○の言う事なら喜んで。」

「仕方ありませんね……」



「どうう? 気持ちいい?」
「マケドニアのご奉仕は
お気に召しましたか?」
「これがペガサス三姉妹の
トライアングルアタックです。」

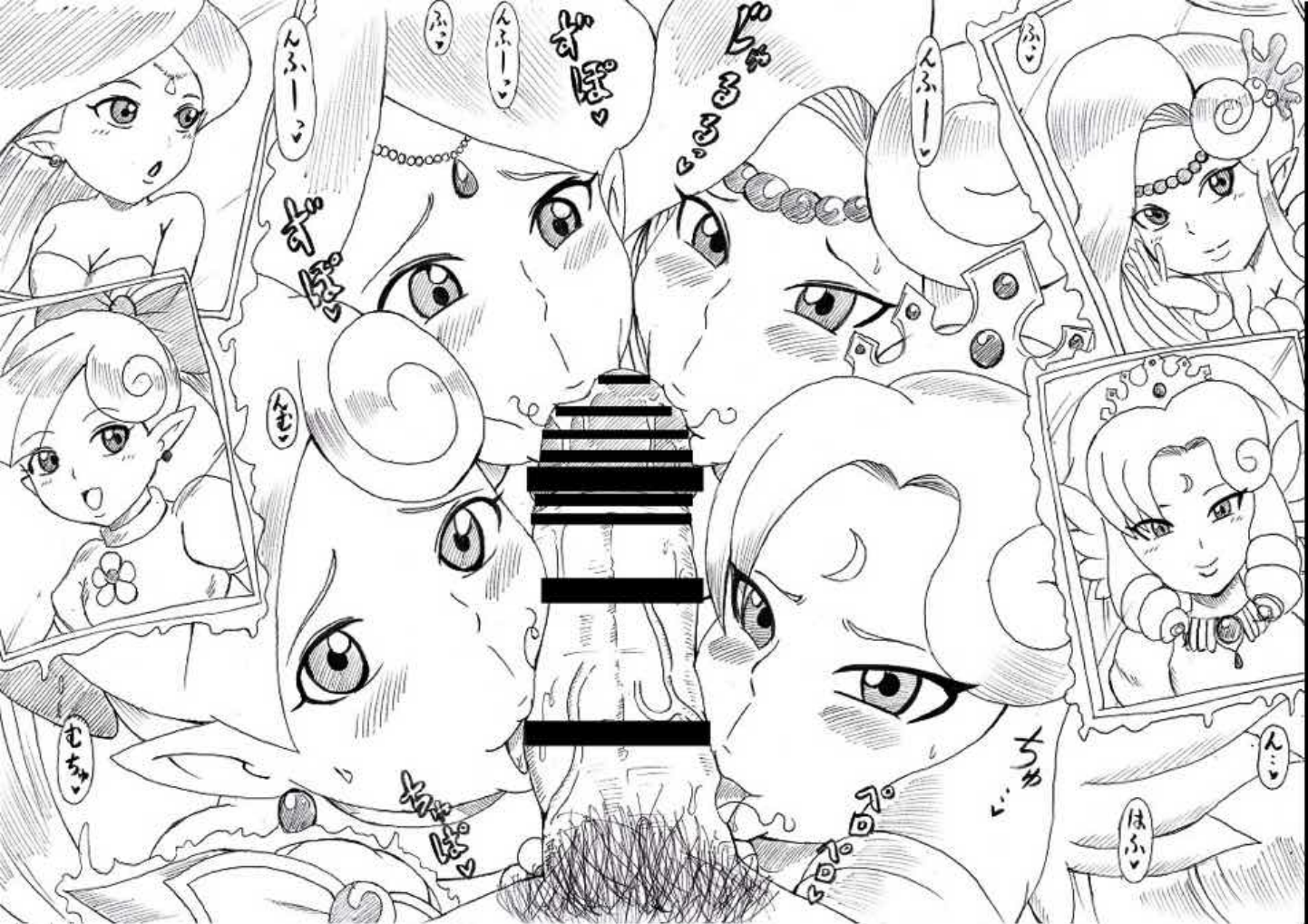


今度デートしてあげるから…」

「プロデューサーお願い。

「事務所社長の私からもお願いするわ…」

「お願いです…受けた仕事は一生懸命頑張ります」



「ママにはナイシヨだよ?」